査読論文

八戸工業大学紀要　第 37 巻（2018） pp. 21 - 39

八戸市の若者の「気づかない方言」と言語活動

岩崎 真梨子[†]・夏坂 光男[††]・日比 俊介[†††]・畑 文子[††††]

A dialect questionnaire survey focusing on younger generations in Hachinohe City

Mariko IWASAKI[†], Mitsuo NATSUSAKA[††], Shunsuke HIBI[†††] and Fumiko HATA[††††]

ABSTRACT

A general perception in southern Aomori, or the Nanbu region, is that younger generations do not use the local dialect of Japanese. We administered a questionnaire to understand the language usage among the youth raised in the Nanbu region of Aomori. The questionnaire revealed that there are two major dialects used in the region. One is the traditional dialect, and the other is an "unnoticed" dialect. The study shows that the youth in the region perceived that they use their dialect in their own unique way. On the other hand, the dialect that is used by the youth is largely unrecognized.

Key Words: *dialect questionnaire, Southern region of Aomori, "unnoticed" diarect, traditional dialect, youth vocabulary*

キーワード : 方言アンケート，青森県南部地域，気づかない方言，伝統的方言，若者のことば

1. はじめに

本研究は、青森県南部地域(青森県南東部)で使われている方言に関するアンケート調査を行い、八戸市とその周辺地域を地元とする若者の言語活動について検討し、若者がどのように、またどのような意識で方言を用いているかを明らかにするものである。

調査した方言は、若年層にも使われていることばとした。特に、地域性を持っているが共通語形と認識され、若年層にも使われることばは、いわゆる「気づかない方言」である。東北の例として「～したトキある(～したことがある)」などがある。また、「かっちゃぐ(引っ掻く)」など、古くからある「伝統的方言」についてもアンケート調査を行い、「気づかない方言」の結果と比較する。

アンケート調査は、八戸市の大学や高等学校に通う大学生や高校生といった若者を対象に行い、その結果から若者の方言の使用状況について検討した。

結論として、青森県南部地域にも、他地域とは異なる特徴的な方言の使用が認められることが明らかになった。一方で、若者の方言使用に対する意識として、「特に意識して使っていない」や「好きとも嫌いともいえない」といった消極的な回答も得られた。こうした意識の希薄さは、若者たちの方言の使用実態にも影響して

平成 29 年 12 月 4 日受付
平成 30 年 1 月 31 日受理
† 基礎教育研究センター・講師
†† 感性デザイン学部感性デザイン学科・技師
††† 感性デザイン学部感性デザイン学科・4 年
††† 八戸工業大学第二高等学校・教諭

いるのではないかと推測される。

2. 先行研究

本節では先行研究に基づいて研究の背景ならびに動機について述べ、本研究の目的を示す。

2.1 青森県の方言と南部地域のことば

北東北に含まれる青森県は、『日本のことばシリーズ2　青森県のことば』[1](編集代表　平山輝男、青森県編者 佐藤和之、以下『青森県のことば』と記す)によると、大きく津軽地域と南部地域に分けられている(以下、本稿内で南部地域と記す場合は、すべて青森県の南部地域を指す)。さらに、南部地域は下北・上北・三八の三区分、津軽地域は内陸部と沿岸部に下位分類される。

方言の区分としては、南部方言、下北方言、津軽方言の三つに分かれる。以下、**図1**に青森県の方言の地域区分を示す。

図1　青森県の方言区分

この三地域は方言が異なり、特に南部方言と津軽方言では大きく異なる。このことは、青森県民や方言研究者の間では周知の事実である。先に挙げた『青森県のことば』の例を挙げる。

表1　津軽方言と南部方言

共通語形	津軽側語形	南部側語形
顎	オドケ◦	アキ◦タ
眩しい	マツコイ	マツボイ
くすぐったい	モチョコチャイ	モチョコイ
灸をすえる	ヤシ　タデル	キュー　ヤグ
恥ずかしい	メク◦セ	ショシ
目を覚ます	オドガル	オドロク
(犬などを)飼う	タデル	アズガル
(雨が降る)から	降るハンデ	降るスケ
(雨が降る)でしょう	降るビョン	降るゴッタ
(雨が降り)そうだ	降るンタ	降るミッタ
(～しては)駄目だ	マイネ	ワガネ

(『日本のことばシリーズ2　青森県のことば』p.3)

このような違いがありながら、一般的な「青森方言」のイメージや、マスメディアなどで取り上げられる事例は、津軽方言に偏っている感がある。

専門的に見ても、此島(1968)[2]において「南部弁に関しては、従来研究がきわめて少なく、特に下北に関してはほとんど見るべきものがないと言ってよかったのであるが(以下略)」(p.27)と記述されている。この状況は、約50年経った今でも、大きく変わらないように思える。

また、八戸市で勤務し、八戸市周辺で生活する若者と会話すると、しばしば「自分たちは方言を使っていない」という発言を耳にする。場合によっては、40代や50代の方からも同じような発言を聞く。真田(2002)[3]によると、方言残存率の高い都道府県の上位には、沖縄や九州、東北が挙がる。しかしながら、東北に位置するはずの八戸市やその周辺地域、いわゆる南部地域の若者(あるいはより広い年齢層)は、方言をあまり使用していないという意識を持っていることも一因となりそうである。

2.2 津軽地域の方言に対する意識調査結果

2.1節に挙げたような経験を踏まえると、南部地域でも他の多くの地域と同様に、共通語化が進んだり、方言が衰退したりしているのではな

いかと推測される。残念ながら、南部地域でどの程度方言が残存しているか、地元の方々が方言に対しどのような意識を持っているかを示した先行研究は、今のところ見当たらない。

しかし、津軽地域に関しては、佐藤・米田(1999)[4]に、方言に対する意識調査の結果が示されており、南部地域と比較検討するうえで参考になる。

この調査は、1994年秋から1995年春にかけて行われたものである。調査方法は、調査票を配布し被調査者本人が回答を記入、後日回収する自計式留置法である。被調査者は、高校生、活躍層(25～40歳)、高年層(60歳以上)の男性話者、各地点50名ずつとなっている。高校生はよその土地で暮らした経験(外住歴)のない話者、活躍層はそれぞれの土地で生まれ育ち、外住歴が10年以内の話者と、調査地のある都道府県とは違うところで生まれ育ち、成人してから現在の土地に移り住んだ話者に分かれている。高年層はそれぞれの土地で生まれ育ち、外住歴が10年以内の話者のみである。

この調査において、「方言を後世に残したい」と答えた人の割合について、津軽地域ならびに各地域の結果は以下のようになる。

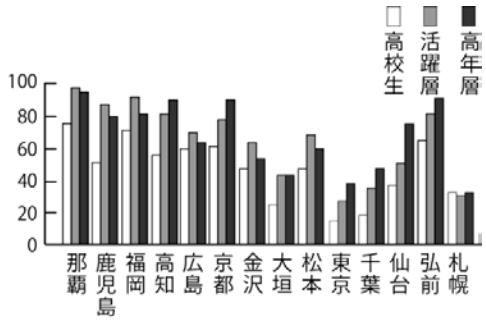

図2　「方言」を後世に残したいと答えた人の割合

（佐藤・米田(1999)p.31参照）

佐藤・米田(1999)でも指摘される通り、那覇・鹿児島・福岡・高知・京都・弘前で高く、大垣を境として西高東低型である。しかし、西高東低のなかでも弘前や仙台、松本は「方言を後世に残したい」と答えた人の割合が他の東日本地域に比べて高い。

同様の結果は、「方言が好きか」という問いでも得られる。**図3**は、自分の方言が「好き」「嫌い」「どちらでもない」という選択肢の中から「好き」と答えた人の割合をグラフにしたものである。高校生、活躍層(25～40歳)、高年層(60歳以上)で分けられており、各世代の平均値は高校生45%、活躍層61%、高年層74%である。弘前は、松本、那覇と並んで、全世代において世代平均の10%を上回る。

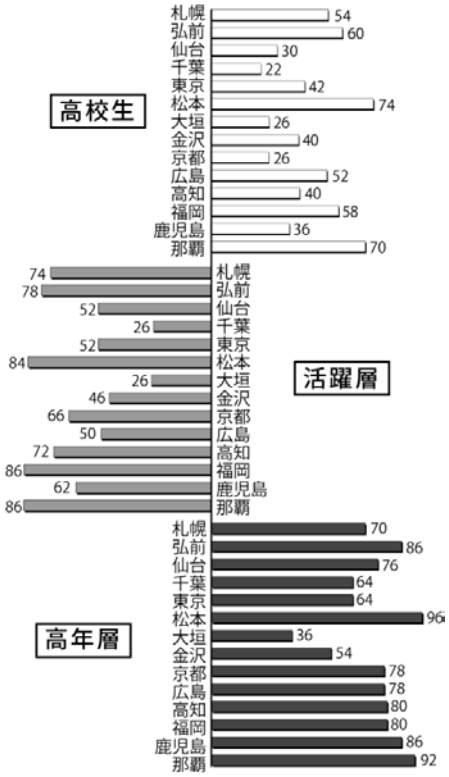

図3　「方言が好き」と答えた人の割合(%)

（佐藤・米田(1999)p.25参照）

こうした意識調査の結果を踏まえ、佐藤・米田(1999)では、調査を実施した14の地点について、**図4**の通り類型を提示している。

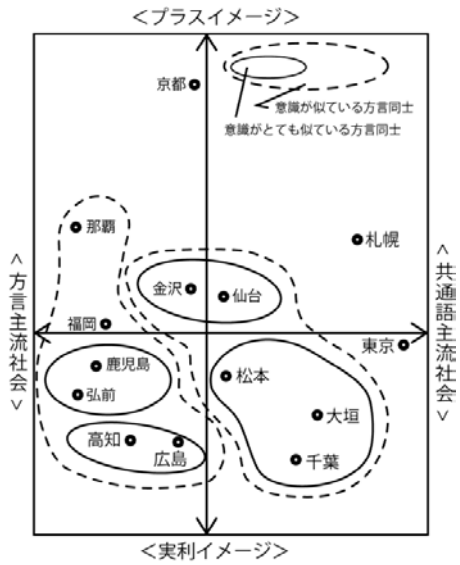

図4　方言イメージで見る14地点の類型

（佐藤・米田(1999)p.40参照）

図4によると、弘前は「方言主流社会」に位置し、方言のイメージとしては「実利イメージ」にある。

これまでに示した通り、青森県のうち津軽地域に関しては、弘前を中心として方言意識に関するデータが残されている。しかし、南部地域は津軽地域とは方言が異なるうえに、意識についても異なる可能性がある。それでは南部地域の方言の使用実態や方言への意識はどのようになっているのかという疑問が生じる。

そこで、本研究では、南部地域の若者に対してアンケート調査を実施し、方言の使用実態や方言に対する意識を明らかにし、若者の言語活動について検討したいと考えた。

3. アンケート調査概要

今回は、アンケート調査票により、方言に対する認識や使用状況に関する調査を行った。アンケート調査票の質問項目は大きく分けて23あり、記述式とマークシート式に分かれている。回答目安時間は20分程度である。また、調査においては、回答者の方言に対する意識を把握するために、ビデオとカメラによる撮影、録音機による音声記録で表情や発言を記録をしている。なお、これらのアンケート調査は、撮影も含めてすべて許可をとったうえで行っている。

アンケート対象者は、10代～30代までの若者である。今回の回答者は高校生と大学生に分かれており、ある程度年齢も絞り込めた（後述）。大学生回答者は、八戸市内の大学に通う学生と弘前市内の大学に通う学生に分かれる。高校生回答者は、八戸市内の高等学校に通う生徒である。

3.1 アンケート調査に使用した方言

アンケート調査に使用とした方言は、(a)(b)の2種類である。

(a)　気づかない方言（日常方言）

(a)は、八戸市の大学生と会話をしているときに使われており、かつ方言であることを指摘したとき、「方言だったんですか？」と驚かれたことば、すなわち方言だと気づいていなかったことばの一部である。一般に、こうした方言は「気づかない方言」と呼ばれる。

気づかない方言の定義については、既に多くの言及があるが、共通するのは「地域性を持つが、（その地元の人には）共通語形と認識され、方言であると気づかれていない」ことである。本研究は、小林・篠崎(2003)[5]に倣った。

> 各地の方言特徴の中には、地域性を持っているにもかかわらず共通語形であると認識され、消滅せずに現在の若年層にも根強く使われているものがある　(p.211)

しかし、どのことばが南部地域の「気づかない方言」かということは、まだ明らかになっていない。そこで、本稿で重視したのは、「消滅せずに」「若年層にも根強く使われている」の2点である。さしあたって、現在でも使われていることばで、若年層が使っているという点に注

目し、気づかない方言(日常方言)とした。

以下、**表2**に、今回のアンケート調査で取り上げた方言、方言の意味(示せる場合は対応する共通語)と例文を示す。

表2　アンケート調査に用いた気づかない方言

1	方言	～(ラ)サル
	意味	状態の存続、可能 （共通語　テイル、デキル）
	例文	本、オカサッてる このペン、カカサラない　※1
2	方言	(～を)デカス
	意味	仕上げる
	例文	明日までに書類をデカシたい
3	方言	(～した)トキ
	意味	経験の有無（共通語　(～した)コト）
	例文	そのお店行ったトキない
4	方言	(～し)ナイトナイ　※2
	意味	義務（共通語　ナケレバナラナイ）
	例文	明日までにレポートを書かナイトナイ
5	方言	(テレビに)ハイル
	意味	(テレビに)映る
	例文	野球(番組)ハイッてるよ
6	方言	(手袋を)ハク
	意味	手袋を身につける
	例文	寒いから手袋ハイていけ
7	方言	～ヨリダッタラ
	意味	比較（共通語　～ヨリモ）
	例文	それヨリダッタラ、これにしよう
8	方言	(～して)ラ
	意味	状態の存続（共通語　(～して)イル）
	例文	まだ起きてラよ

※1　「カカサンない」とも言う。
※2　「(～し)ナキャナイ」とも言う。

なお、これらの方言に関しては、日常の自然談話で使っており、使っていること自体に気づきにくいため、調査票にも例文を提示し、回答者が判断しやすいようにした。

なお、八戸市で筆者が聞いた「気づかない方言」は、この限りではない。他にも、同意を示す「ダカラサ」(会話例「テスト、難しそうだよね」「ダカラサー」)や、動作を共にする人数を表わす「～シテ」(例「買い出しどっちが行く？」「ふたりシテ行こうよ(共通語では「ふたりで」)」)などが思いつく。今回は、特によく耳にすると判断した8項目を取り上げている。

(b)　伝統的方言

(b)は、辞典に挙がっているもので、仮に伝統的方言とした。

表3　アンケート調査に用いた伝統的方言

	方言	意味
1	オバグダ	生意気な
2	カッチャグ	引っ掻く
3	シカ゜マ	つらら
4	シャッコイ	冷たい
5	チョス	触る
6	ニカ゜	赤ん坊
7	ブチヨル	痣になる
8	ヘッカンスル	いじめる

（佐藤亮一編『都道府県別　全国方言辞典』参照）

(a)の気づかない方言は、若者が日常で比較的よく使っていると判断したものだが、(b)の伝統的方言は、若者と会話していてもほとんど耳にすることはない。

筆者は、このような、若者は使っていないようだが、辞典には掲載されている方言について、2013年に八戸市の大学に通う大学生に対してアンケート調査を実施した。今回の8項目は、2013年調査を踏まえたものである。以下、2013年調査について簡単に記す。

佐藤亮一編『都道府県別　全国方言辞典』[6]に掲載される86項目(※3)の方言について、「使う」「使わないが意味は分かる」「知らない」のいずれかで回答させた。回答者は192名で、うち有効回答者数は167名である。10歳までに最も長く住んでいた地域の内訳は、青森県124名(南部地域100名、津軽地域19名、下北地域5名　※4)、岩手県19名、秋田県14名、山形県3名、北海道3名、宮城県・福島県・千葉県・埼玉県が各1名である。また、年齢は10代136名、20代31名(地域無回答者

も含む）である。性別は男性144名（86.2%）、女性23名（13.8%）で、男性が圧倒的に多かった。

※3　1項目に誤植があり、85項目分の結果である。
※4　2013年の報告で、南部地域99名、下北地域6名となっているのは、六ケ所村の回答者のデータが下北地域の特徴を持っており、下北地域に含めたためである。しかし、方言区分としては、**図1**に示した通り、南部地域100名、下北地域5名とするのが妥当である。

このアンケート調査により、**表4・表5・表6**の結果を得た（詳しくは岩崎(2014)[7]参照）。

表4　「使う」割合が高い方言　上位10

方言	意味	割合(%)
シャッコイ	冷たい	63.2
チョス	触る	36.1
～キャ	～ね。例：んだっきゃ（＝そうだよね）	34.3
ワ	俺	30.5
モチョコチェ	くすぐったい	21.6
ゴンボホル	だだをこねる	20.4
アメクセ	食物が腐った状態またそのにおい	19.7
オカ゜ル	成長する	19.1
～ドモ	～けれども	19.1
メコ゜イ	可愛い	19.1

表5　「使わないが意味は分かる」割合が高い方言　上位10

方言	意味	割合(%)
メコ゜イ	可愛い	53.8
ワ	俺	51.4
カッチャグ	ひっかく	42.7
ジョッパリ	頑固者	42.7
ゴンボホル	だだをこねる	42.1
イーゴッタ	良さそうだ	41.5
コイヘ	来て下さい	39.1
アンベ	具合。状態。	35.3
～ども	～けれども	34.7
メク゜セ	恥ずかしい。	33.1

表6　「知らない」割合が高い方言　上位10

方言	意味	割合(%)
ヘッカンスル	いじめる	100
ブチヨル	痣になる	99.4
ニカ゜	赤ん坊	99.4
オバグダ	横柄だ	99.3
シカ゜マ	つらら	98.7
ヨノメ	魚の目	97.6
シヌ	痣になる	97.6
ヤッパハマリ	何にでもすぐに首をつっこむ人	97.5
ヘンカス	叩く	96.4
ヨロタ	太股	96.4

表4によると、大学生167名が最も「使う」と答えたのは「シャッコイ」（63.2%）である。しかし、次に「使う」割合の高い「チョス」は36.1%と大きく差が開き、大学生は辞典に掲載される方言を使う割合が低い。即ち、伝統的方言は消滅する傾向にあると考えられる。

表5・表6から導き出される結論も同様である。**表5**は「使わないが意味は分かる」、つまり（自分では使わないが、両親や祖父母が使ったときに）理解はできる方言である。「使う」方言に比べて割合は高いが、30%～50%台に留まる。さらに、「知らない」方言は100%が「知らない」と答えた「ヘッカンスル」を含め、上位がすべて90%以上という高い割合である。

今回は、若者が比較的よく使うであろう「気づかない方言」の比較対象として、「使う／使わないが意味は分かる」の割合が高かった伝統的方言「シャッコイ」「カッチャグ」「チョス」、「知らない」の割合が高かった伝統的方言「オバグダ」「シカ゜マ」「ニカ゜」「ブチヨル」「ヘッカンスル」を項目に加えた。最も割合の高い方言に変化があるか、使わない割合の低い方言が消滅する方向にあるかといった点も明確化し、若者に継承されない方言の傾向を検討するためである。

3.2 アンケート調査方法

大学生に対するアンケート調査は、2017年5月

に八戸市内の大学、同年7月に弘前市内の大学で実施した。

調査方法は集合調査法とし、講義実施中と終了後にアンケート調査票を配布、調査者が質問内容や回答方法を順次指示し、回答者からの質問がある場合には質問に答え、かつ回答者同士の対話も許可した。この方法を取ったのは、回答者に対し、日常の自然談話においての言語活動を、お互いに確認できる状況を作るためである。また、この手順を取ることにより、調査票によるアンケート記述に信頼性をもたせる意図もある。また、八戸市内の大学では、アンケート終了直後に方言に対する解説も行った。

高校生に対するアンケート調査は、2017年9月に八戸市内の高等学校で実施した。アンケート調査票を高等学校に配布し、担当教員が各授業内で行った。

4. 南部地域　大学生のアンケート結果

まず、大学生のアンケート結果を示す。

アンケート回答者は、八戸市内の大学に通う大学生 127 名、弘前市内の大学に通う大学生 109 名の、合計 236 名である。

3 歳から 10 歳を言語形成期としたとき、回答者がその時期に暮らした地域をまとめると、**表 7** のようになる。

表 7　言語形成期に暮らした地域

地域		言語形成期(人)	八戸市内の大学に通う学生(人)	弘前市内の大学に通う学生(人)
青森県	南部地域	92	83	9
	下北地域	4	2	2
	津軽地域	52	17	35
岩手県		21	11	10
秋田県		12	8	4
宮城県		6	1	5
山形県		1	0	1
福島県		3	0	3
新潟県		2	0	2
群馬県		1	1	0
埼玉県		2	1	1
東京都		1	0	1
千葉県		1	1	0
愛知県		1	0	1
北海道		36	1	35
無回答		1	1	0
合計		236	127	109

最も多いのは青森県の 148 名、次いで北海道、岩手県、秋田県である。

この結果より、特に青森県内の方言地域に方言分析を絞り込むために、言語形成期(3～10 歳)において青森県の南部地域、下北地域、津軽地域に住んでいたと回答した大学生を抽出し、検討する。

言語形成期に過ごした地域の分布図は、**図 5** のようになる。

図 5　言語形成期に暮らした地域（分布図）

アンケート回答者の年齢は、10 代以下、11～20 歳、21～30 歳、31～40 歳、41～50 歳、51～60 歳、61 歳以上で尋ねており、今回は回答者全員が 11～20 歳ならびに 21～30 歳にあてはまった。大学生は 18 歳以上であることから、回答者の年齢は 18 歳から 20 代半ば頃と推定される。

性別については、男性 137 名(58.1%)、女性 97 名(41.1%)、無回答 2 名であり、男性が多い。

今回は、人数の少ない下北地域も含め、南部地域と下北地域の回答者、96 名のデータを挙げる(全大学生の 40.7%にあたる)。

4.1 気づかない方言の認識(南部地域 大学生)

まず、8 項目の方言について、知っているか否かの結果を挙げる。

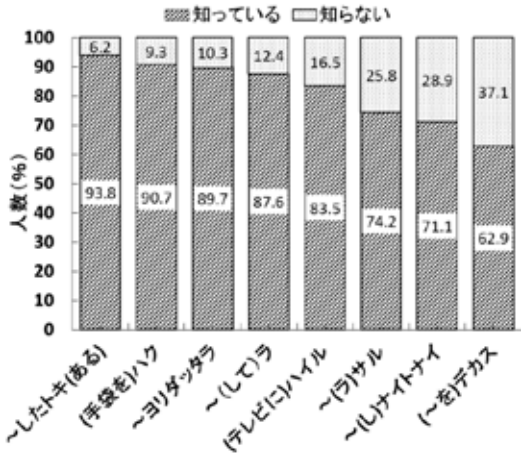

図 6　気づかない方言の認識（南部地域 大学生）

最も「知っている」割合が高いのは「～したトキ(ある)」である。また、「～したトキ(ある)」から「(テレビに)ハイル」まではすべて「知っている」割合が 80%を超える。

一方、「知っている」割合が低いのは「(～を)デカス」、次いで「～(し)ナイトナイ」である。

4.2 方言だと思っているか(南部地域 大学生)

続いて、8 項目の方言について、方言だと思っているか否かの結果を挙げる。なお、この質問は、先の「知っているか否か」で「知っている」と答えた回答者のみを対象とする。

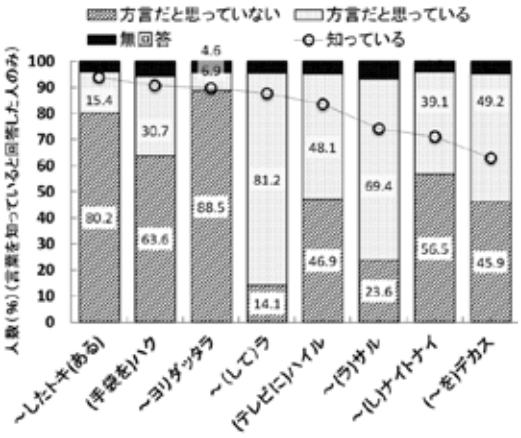

図 7　方言だと思っているか（南部地域 大学生）

「方言だと思っていない」割合が特に高いのは「～したトキ(ある)」「～ヨリダッタラ」で、ともに 80%を超える。次いで高いのは「(手袋を)ハク」である。

一方、「方言だと思っている」割合が高いのは「～(して)ラ」と「～(ラ)サル」である。次いで「(～を)デカス」「(テレビに)ハイル」「～(し)ナイトナイ」と続く。このうち、「(～を)デカス」と「～(し)ナイトナイ」は、「知っている」割合も低い。

4.3「気づかない方言」の使用状況(南部地域 大学生)

最後に、これらの方言を日常で使っているかどうか、使用状況の結果を挙げる。

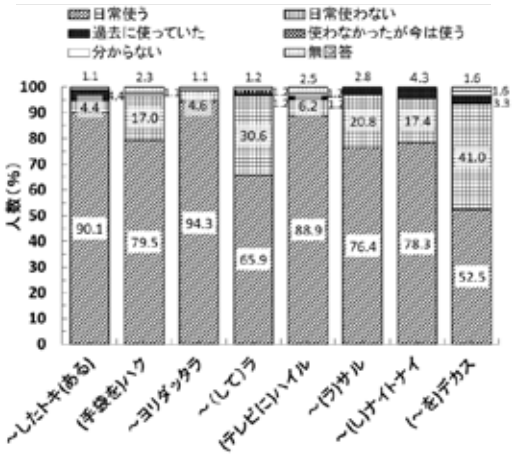

図 8　日常で使用するか（南部地域 大学生）

選択肢は、**図 8** に示す通り、日常で「使う」「使わない」「過去使っていたが今は使わない」「過去使っていなかったが今は使う」「分からない」である。

「使う」割合が高い順に挙げると、「～ヨリダッタラ」「～したトキ(ある)」「(テレビに)ハイル」の 3 語が 90%台、次いで「(手袋を)ハク」である。

一方、「使う」割合が低いのは、「(～)をデカス」と「～(して)ラ」である。ただし、他の方言に比べれば低いが、最も低い「(～を)デカス」でも半数は超える。

まとめると次のようになる。

- 「～したトキ(ある)」「～ヨリダッタラ」の 2 語は、方言だと思っておらず、知っている割合も、使う割合も高い。
- 上記の 2 語ほどではないが「(手袋を)ハク」も、方言だと思っておらず、知っている割合、使う割合ともに高い。
- 「(テレビに)ハイル」は、知っている割合、方言だと思っている割合、使う割合のすべてが高い。
- 「～(して)ラ」は、知っている割合と方言だと思っている割合は高いが、使う割合はやや低い。

- 「～(ラ)サル」「～(し)ナイトナイ」は、知っている割合が低く、方言だと思っている割合も平均程度か平均以下だが、使う割合は高い。
- 「(～を)デカス」は、知っている割合が最も低く、方言だと思っている割合も、使う割合も平均程度で、あまり定着していない可能性がある。

ここで割合が高い・低いと示す場合は、8 項目のなかで比較した際の高低を指す。また、別の基準として、「知っている」割合は全体的に高く平均が 82%だが、「方言だと思っている」「使う」割合は 50%程度が平均であり、半数を超えた場合は高めと判断する。

結果に基づいて 8 項目の方言を分類すると、以下のようになる。

表 8　方言の分類

方言の認識	方言の使用	
	使う	使わない
方言だと思っている	(テレビに)ハイル ～(ラ)サル	～(して)ラ
方言だと思っていない	～したトキ(ある) (手袋を)ハク ～ヨリダッタラ	

今回の調査結果で、「気づかない方言」の定義に当てはまったのは、「～したトキ(ある)」「(手袋を)ハク」「～ヨリダッタラ」の 3 語である。今後もアンケート調査を継続するにあたって、アンケート調査票の改正に活かしたい。

5. 南部地域　高校生のアンケート結果

続いて、大学生よりもより年齢が低い高校生の結果を挙げる。

八戸市内の高等学校に通う高校生 651 名から回答を得た。3 歳から 10 歳を言語形成期としたとき、回答者がその時期に暮らした地域をまとめると、**表 9** のようになる。

表 9　言語形成期に暮らした地域

地域	人数(人)
青森県・南部地域	584
青森県・下北地域	3
青森県・津軽地域	8
青森県・地域不明	5
岩手県	15
秋田県	1
宮城県	3
山形県	1
福島県	3
新潟県	1
栃木県,	2
群馬県	2
茨城県	2
千葉県	1
埼玉県	2
東京都	3
神奈川県	1
富山県	2
石川県	1
愛知県	1
大阪府	3
北海道	3
沖縄県	1
海外	1
無回答	2
合計	651

以下、大学生のデータと同様、言語形成期を南部地域・下北地域で過ごした587名のデータのみを挙げる。

アンケート回答者の年齢は、15 歳から 18 歳頃

までと推定される。

また、性別については、男性249名(42%)、女性335名(57%)、無回答3名であり、女性が多い。

5.1 気づかない方言の認識(南部地域 高校生)

気づかない方言を知っているか否かについては、以下のような結果となった。

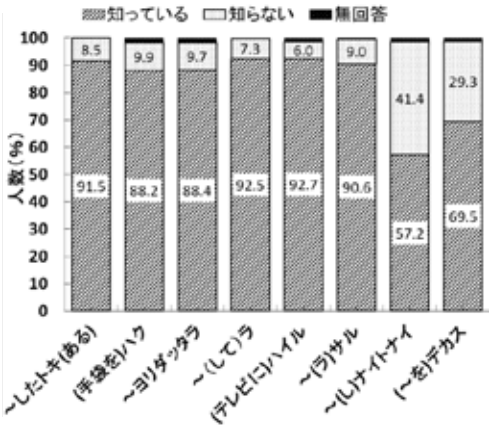

図9　気づかない方言の認識（南部地域 高校生）

「知っている」割合が高いのは「(テレビに)ハイル」「～(して)ラ」「～したトキ(ある)」「～(ラ)サル」で90%超、「(手袋を)ハク」「～ヨリダッタラ」も80%台後半である。

一方、「知っている」割合が低いのは「～(し)ナイトナイ」と「(～を)デカス」である。

大学生の結果と比較すると、総じてより数値が高いことが指摘できる。高校生のほうが低いのは「～(し)ナイトナイ」1語のみである。

一方で、知っている割合が高い方言と低い方言に大きな差異はなく、特に「～(し)ナイトナイ」と「(～を)デカス」を知っている割合が低いのは大学生も高校生も共通している。

5.2方言だと思っているか(南部地域 高校生)

続いて、8項目の方言について、方言だと思っているか否かの結果を挙げる。

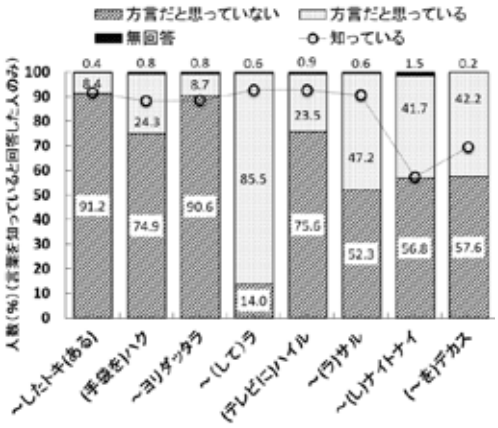

図10　方言だと思っているか（南部地域 高校生）

「方言だと思っていない」割合が特に高いのは、「～したトキ(ある)」「～ヨリダッタラ」の2語である。「～(して)ラ」のみ、「方言だと思っている」割合が圧倒的に高い。

また、大学生では「(テレビに)ハイル」を「方言だと思っている」割合が高いのに対し、高校生では「思っていない」割合が高いという結果になった。

5.3「気づかない方言」の使用状況(南部地域 高校生)

最後に、使用状況の結果を挙げる。

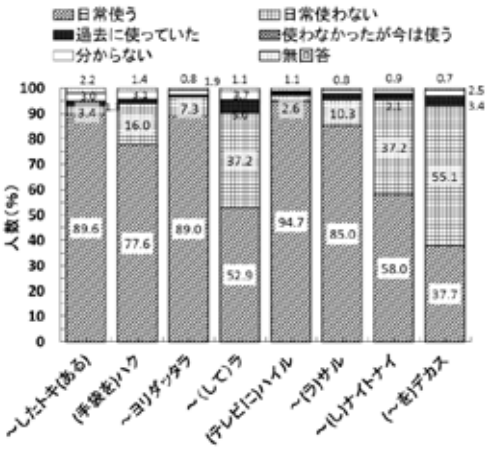

図11　日常で使用するか（南部地域 高校生）

「使う」割合が高いのは、「(テレビに)ハイル」「～したトキ(ある)」「～ヨリダッタラ」「～(ラ)サル」、次いで「(手袋を)ハク」である。

「使う」割合が低いのは、「(～)をデカス」と「～(して)ラ」である。

使用状況は、ほぼ大学生の結果と同様である。唯一、「～(し)ナイトナイ」が、大学生のほうが高校生よりも使うという結果となった。なぜそうなるかといった点については、憶測の域を出ないが、日常で使うような場面があるかないか、他地域の話者とどの程度関わっているかといった要素があるのではないかと推測する。

6. 大学生 他地域の結果との比較

次に、大学生で、地域差を見ていきたい。津軽地域52名と、各地域と他都道府県を合わせた全地域236名のデータと比較した場合に、どのような相違があるか検討する。

6.1 津軽地域の「気づかない方言」に関するアンケート結果

まず、気づかない方言を知っているか否かの結果を挙げる。

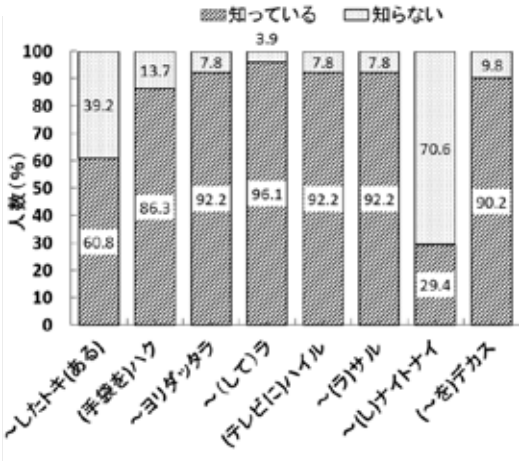

図12　気づかない方言の認識（津軽地域 大学生）

南部地域と津軽地域で特に異なるのは、「～したトキ(ある)」「(～を)デカス」、そして「～(し)ナイトナイ」である。

「～したトキ(ある)」は、南部地域では93.8%と最も知られている方言だが、津軽地域では60.8%である。他方「(～を)デカス」は、津軽地域では90.2%が知っているのに対し、南部地域では62.9%である。「～(し)ナイトナイ」も、南部地域で71.1%が知っているが、津軽地域は29.4%と最も低い。

これに対し、「(手袋を)ハク」「～ヨリダッタラ」「～(して)ラ」「(テレビに)ハイル」「～(ラ)サル」は、両地域ともに、ある程度「知っている」という回答が得られた。

次に、方言だと思っているか否かの結果を挙げる。

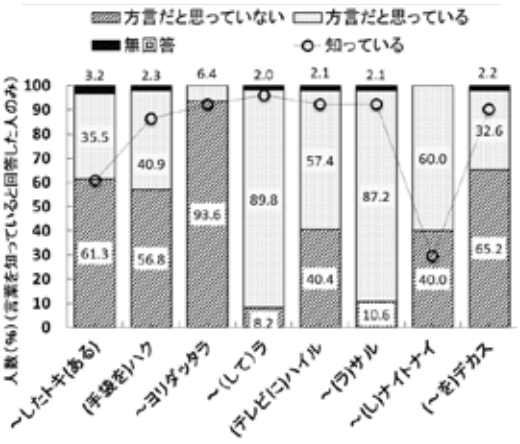

図13　方言だと思っているか（津軽地域 大学生）

「～(して)ラ」「～(ラ)サル」は、南部地域・津軽地域とも方言だと思っている割合が高いことが明らかになった。

一方、「知っている」「知らない」で地域差のあった「～したトキ(ある)」ならびに「(～を)デカス」については、「知っている」割合の高い地域のほうが、「方言だと思っていない」割合が高い。

また、両地域ともに「方言だと思っていない」割合が高いのは、「～ヨリダッタラ」であ

る。これは、両地域に共通する気づかない方言なのではないかと考えられる。

最後に、使用状況の結果を挙げる。

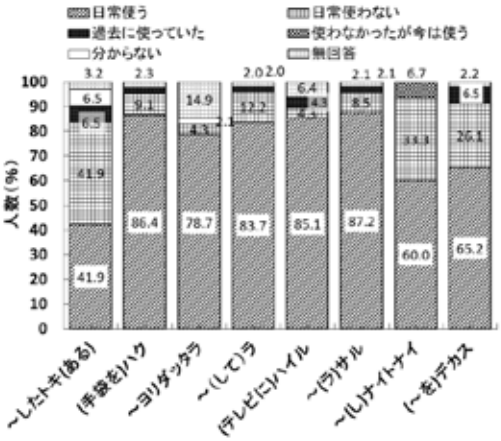

図14　日常で使用するか（津軽地域 大学生）

使用状況についても、「知っている」か「知らない」かによって南部地域と津軽地域で異なりが生じる。「知らない」ことばである「～したトキ(ある)」や「～(し)ナイトナイ」は使う割合も低い。

南部地域と津軽地域の差をまとめると、以下のようになる。

表10　気づかない方言に対する認識・使用状況まとめ

両地域	知っている 方言と思っていない	ヨリダッタラ (手袋を)ハク
	知っている 方言と思っている	～(ラ)サル ～(して)ラ (テレビに)ハイル
南部地域	知っている 方言と思っていない	～したトキ(ある) ～(し)ナイトナイ
津軽地域	知っている 方言と思っていない	(～を)デカス

なお、「(手袋を)ハク」や「(テレビに)ハイル」は、「思っている」「思っていない」が拮抗しており、**表 10** にも段階がある。今後は段階も踏まえた検討が必要である。

6.2 全地域の「気づかない方言」に関するアンケート結果

まず、気づかない方言を知っているか否かについて、結果を挙げる。

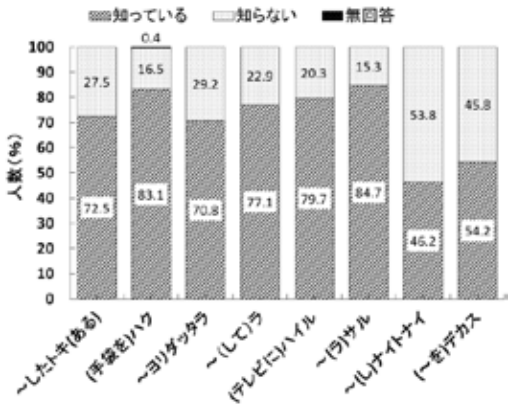

図 15　気づかない方言の認識（全地域 大学生）

全地域で「知っている」割合が最も高いのは、「～(ラ)サル」である。以下、「(手袋を)ハク」「(テレビに)ハイル」と続き、上位の順序は南部地域の結果と異なる。一方、下位は「(～を)デカス」と「～(し)ナイトナイ」で共通している。

続いて、方言だと思っているか否かの結果を挙げる。

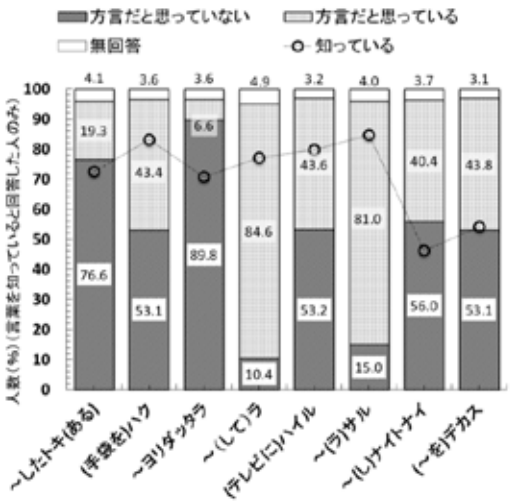

図 16　方言だと思っているか（全地域 大学生）

「～したトキ(ある)」と「～ヨリダッタラ」が「方言だと思っていない」割合が高いのは、南部地域と共通である。また、「～(して)ラ」「～(ラ)サル」が「方言だと思っている」割合が高いのも共通している。それ以外の方言に関しては、「思っている」割合と「思っていない」割合がほぼ半数に分かれている。

最後に、使用状況の結果を挙げる。

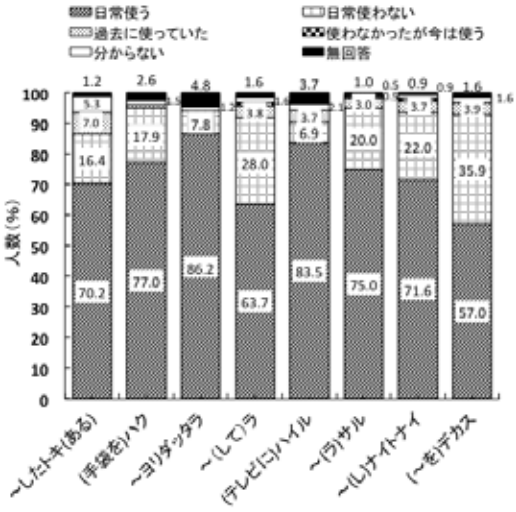

図17　日常で使用するか（全地域 大学生）

「～ヨリダッタラ」「(テレビに)ハイル」「(手袋を)ハク」「～したトキ(ある)」は南部地域と共通して高い。また、「(～を)デカス」「～(して)ラ」が低い点も共通している。

ただし、割合については南部地域が高いもので90%を超えるのに対し、全地域では「～ヨリダッタラ」の86.2%が最も高く、また、全体的に差が小さい。

津軽地域や全地域との比較検討を踏まえて、南部地域の若者の方言の使用実態には、以下のような特徴があると考えられる。

- 気づかない方言として特徴的なのは「～したトキ(ある)」である。
- 方言であると思っている「～(して)ラ」を使う割合が低い。
- 「～ヨリダッタラ」が気づかない方言であり、かつ使われる点は他地域と共通している。

以上の結果から、方言を使っている意識はあまりないという現状に対し、南部地域の特徴も示すことができると考えられる。

7. 伝統的方言のアンケート結果

7 節では、伝統的方言 8 項目の調査結果を挙げる。まず南部地域、次いで他地域の結果を挙げて比較検討を行う。

7.1 南部地域 大学生の「伝統的方言」に関するアンケート結果

まず、南部地域の伝統的方言に対するアンケート結果を挙げる。

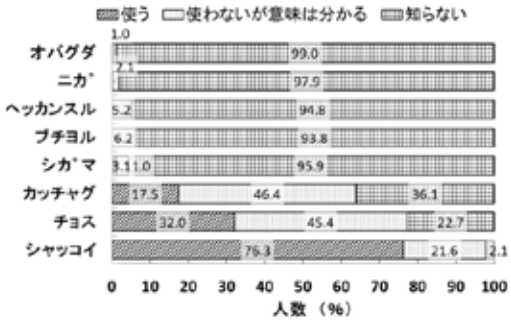

図 18　伝統的方言のアンケート結果（南部地域 大学生）

「シャッコイ」「チョス」「カッチャグ」の 3 語は、2013 年時のアンケートと同様、「使う」という回答が得られた。

また、今回は、「シカ゛マ」についても「使う」という回答があった。しかし、「ブチヨル」「ヘッカンスル」「ニカ゛」「オバグダ」に関しては、「使わないが意味は分かる」「知らない」のみであり、特に「オバグダ」は、2013

年と変わらず「知らない」割合が高いことが明らかになった。

気づかない方言の認識に関するアンケート結果と比べても、伝統的方言を「使う」「使わないが意味は分かる」割合は低い。

7.2 南部地域 高校生の「伝統的方言」に関するアンケート結果

続いて、高校生の伝統的方言に関するアンケート結果を挙げる。

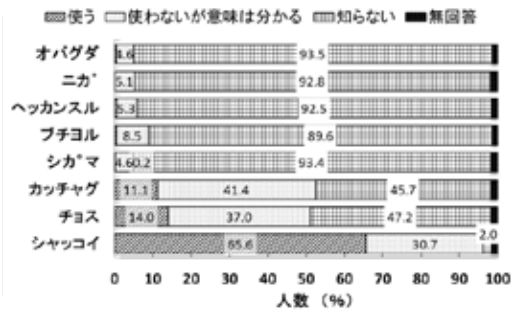

図19　伝統的方言のアンケート結果（南部地域 高校生）

高校生は、大学生と比べると、「シャッコイ」「チョス」「カッチャグ」についても、「使う」や「使わないが意味は分かる」の割合が低くなっている。これは、大学生では「使う」方言が、高校生になると衰退している可能性があることを示している。

一方で、大学生では「使わないが意味は分かる」割合の低い「オバグダ」など5語については、高校生のほうが「使わないが意味は分かる」割合が高いという結果も出ている。

7.3 津軽地域 大学生の 「伝統的方言」に関するアンケート結果

次に、津軽地域の伝統的方言に関するアンケート結果を挙げる。

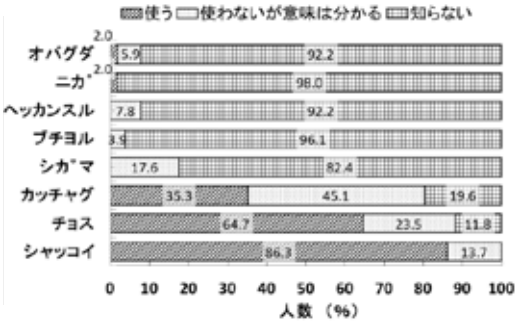

図20　伝統的方言のアンケート結果（津軽地域 大学生）

津軽地域は、「使う」割合が高い3語、「シャッコイ」「チョス」「カッチャグ」については南部地域に比べて「使う」割合が高いことが明らかである。

しかし、「使わないが意味は分かる」割合は南部地域の高校生のほうが高く、世代差、年齢差が気になるところである。

7.4全地域 大学生の 「伝統的方言」に関するアンケート結果

最後に、全地域の大学生の「伝統的方言」のアンケート結果を挙げる。

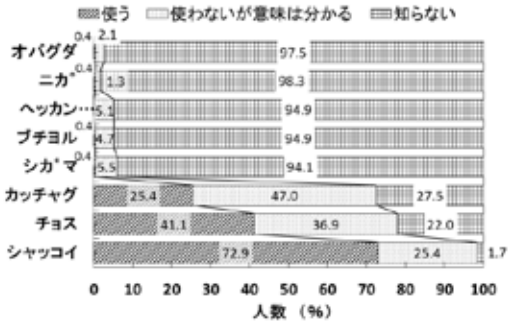

図21　伝統的方言のアンケート結果（全地域 大学生）

上位と下位の「使う」「使わないが意味は分かる」「知らない」の割合の順序に大きな差異はない。数値としては、南部地域 大学生の結果と津軽地域 大学生の結果の間あたりをとる。

一方、南部地域 高校生と比較すると、「シャ

ッコイ」「チョス」「カッチャグ」の3語はやはり大学生のほうが「使う」「使わないが意味は分かる」の割合が高いが、それ以外の5語については依然として高校生のほうが「使う」「使わないが意味は分かる」の割合が高い。この要因については、同居している人や一緒に過ごした人など、別の観点も踏まえて今後考察したい。

8. 意識調査

最後に、大学生138名に対する方言の意識調査のデータを挙げる。この調査は、「気づかない方言」と「伝統的方言」に関するアンケート調査が終了し、結果を提示したあとで、自由記述形式で答えさせたものである。

質問項目は、「普段から方言を使うように心がけていますか(理由もあわせて書いてください)」「自身が使っている方言は好きですか」「理想とすることばはどういうものですか(なるべく方言を使いたいなど、具体的に書くよう口頭で指示)」の3つである。

回答者は、八戸市の大学生138名で、今回のアンケート調査の回答者である。出身地域や言語形成期に過ごした地域は質問していないため、津軽地域や他地域の学生の回答も含まれているが、南部地域の学生が中心である。

8.1 方言の使用に対する意識

はじめに、「普段から方言を使うように心がけていますか(理由もあわせて書いてください)」に対する回答の集計結果を挙げる。

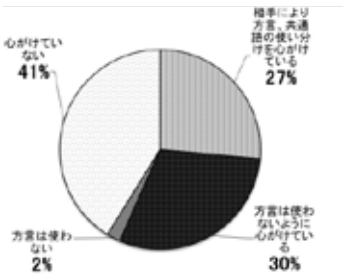

図22　普段から方言を使うよう心がけているか

特に何も心がけていない、普段通り話している(方言かどうかなど気にしていない)といった回答が41%で、各選択肢のなかでは最も多く選ばれた。

一方で、「方言は使わないように心がけている」が30%、「相手により方言と共通語を使い分けている」が27%を占めることから、方言を自身でコントロールしようとしている学生も合計で60%近く存在する。

また、割合の低い「方言は使わない」については、引っ越し回数が多く自身の方言を持ちにくかった場合や、親から方言を話さないよう教育されたといった理由が挙がった。

8.2 自身の方言が好きか

次に、「自身が使っている方言は好きですか」に対する回答の集計結果を挙げる。

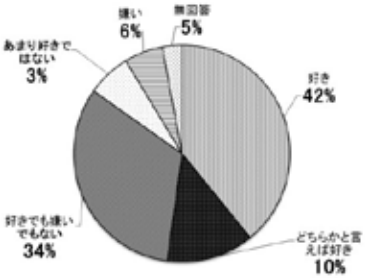

図23　自身が使っている方言が好きか

自身の方言に対する好悪感情に関しては、「好き」と「どちらかと言えば好き」で合計52%となり、「あまり好きではない」「嫌い」が合計で9%であることを踏まえると、方言に対して概ね好感を持っているといえる。

また、「好きでも嫌いでもない」も34%存在し、この選択肢を選んだ学生のなかには、「そもそも方言を使っているのかどうかも分からないので、好きだとか嫌いだとか考えたことがない」と記述していた者もあった。

8.3 方言使用に対する意識と方言への好悪感情の関係性

次に示すのは、先の**図22**「普段から方言を使うように心がけていますか」で、「心がけていない」と答えた56名の、方言に対する好悪の結果をまとめたものである。

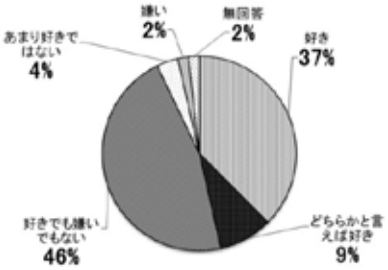

図24　方言の使用を心がけていない若者の方言に対する好悪

図24からも分かる通り、普段から方言や共通語を使うことを意識していない若者は、方言に対する好悪も「好きでも嫌いでもない」が46%と約半数を占め、ことばに対する興味関心が薄いように感じられる。仮にこうした層を無関心層とする。

次に高い「方言を使わないように心がけている」41名の内訳は次の通りである。

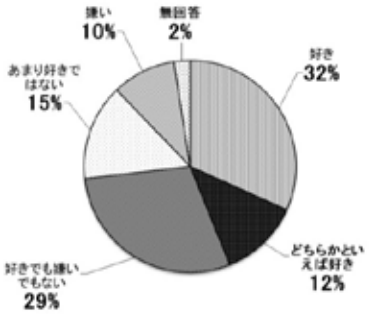

図25　「方言を使わないよう心がけている」若者の方言に対する好悪

方言を使わないよう心がけている場合も、「好き」32%、「好きでも嫌いでもない」29%と、好きか無関心かに分かれる。

これに対し、3番目に高い「相手により方言と共通語を使い分けている」36名の結果は以下の通りである。

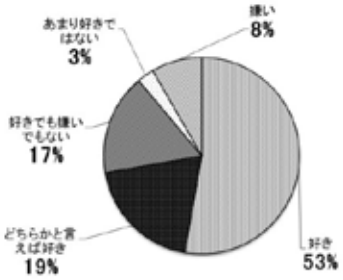

図26　相手により使い分けている若者の方言に対する好悪

相手により使い分けている場合は、「好き」が53%を占める。相手によって使い分けるということは、方言も共通語も使う意識があり、方言が好きだという割合が高いのも肯ける。

8.4 理想とすることば

最後に、「理想とすることばはどういうものですか」に対する回答の集計結果を挙げる。

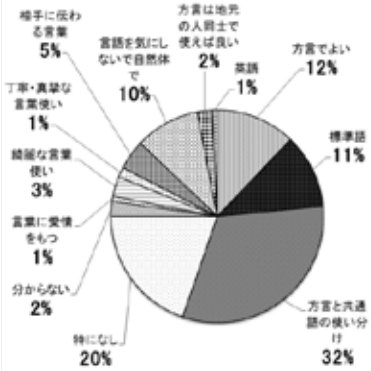

図27　理想とすることば

理想とすることばについては、「方言と共通語の使い分け」が32%で最も割合が高かった。「方言でよい」「標準語」は対になる回答であり、割合も12%と11%で拮抗している。気になるのは、「特になし」20%である。

本研究では、南部地域ではあまり方言を使わないという声や、津軽地域との差が未だ明確でないことに基づき、使用実態や意識を調査するという目的でアンケートを実施した。結果、方言の使用実態については、共通語に近い方言ではあるものの、地域としての特徴が見出せるのではないかという結論を得た。しかしながら、意識調査をしてみると、そもそも自身のことばが方言か否か、方言に対する好悪の感情、どういう言葉遣いをしていきたいかといった意識が普段から低い無関心層がある程度見られるのではないかと考えられる。こうした意識を持つ若者にとっては、方言というもの自体が曖昧模糊としているのかもしれない。

無関心層に対しては、方言アンケート調査を実施することにより、どのことばが方言なのか、自分たちが普段どういうことばを使っているのかを振り返ること自体が、方言に対する自覚を促すことに繋がる可能性もある。

9. おわりに

青森県内の大学や高等学校でのアンケート調査に基づき、若者の方言の使用実態について検討した。現時点では、八戸市を中心とした南部地域の若者の言語活動として、以下のような特徴があるのではないかと考える。

- 共通語に近い方言を気づかずに用いている。特に南部地域、あるいは八戸地域に顕著なのは、「～したトキ(ある)」である。
- 伝統的な方言は、若者にもよく知られている語彙であれば、津軽地域の若者のほうが使用する、あるいは使わないが意味は分かる割合が高い。しかし、大学生で「知らない」割合が高い伝統的方言でも、南部地域の高校生では「使う」「使わないが意味は分かる」割合が高い可能性がある。

また、津軽地域と共通するのは、「～ヨリダッタラ」がよく使われる気づかない方言である点となった。

今回の研究結果により、南部地域の若者に対し「気づかない方言」のアンケートを実施することで、方言への見直しや意識づけをすることが可能ではないかという見通しを得た。今後も継続してアンケートを実施し、その際に項目を増加させたり変更したりすることで、より「気づかない方言」に関する考察が深まると考える。

謝　辞

本稿作成にあたり、弘前市でのアンケート実施にお力添えくださった先生方、第104回、第105回日本方言研究会にてご助言くださった先生方、院生の皆さまに感謝申し上げる。

また、最後になるが、快くアンケートに答えてくれた学生諸子、アンケートの打ち込みに協力してくれた学生諸子、ゼミの学生に御礼申し上げる。

なお、本研究は(一財)青森県工業技術教育振興会より助成をいただいたものである。

参考文献

1) 平山輝男・佐藤和之編：日本のことばシリーズ 2　青森県のことば,明治書院, 2003.
2) 此島正年：青森県の方言,津軽書房, 1968.
3) 真田信治：方言の日本地図―ことばの旅,講談社, 2002.
4) 佐藤和之・米田正人：どうなる日本のことば―方言と共通語のゆくえ,大修館,1999.
5) 小林隆・篠崎晃一編：ガイドブック方言研究,ひつじ書房,2003.
6) 佐藤亮一編：都道府県別　全国方言辞典,三省堂, 2009.
7) 岩崎真梨子：若者と方言―八戸工業大学におけるアンケート―,八戸工業大学紀要 33,2014.

8) 岩崎真梨子・夏坂光男：八戸における若者の方言使用の実態と地域社会の言語活動, 第 105 回研究発表会発表原稿集, 日本方言研究会,2017.

要　旨

本研究は、青森県の南部地域では若者が方言を使わないのではないか、という背景事情のもと、南部地域に住む若者の方言使用の実態をアンケート調査によって明らかにしたものである。アンケート調査に際しては、「気づかない方言」と「伝統的方言」を調査項目とし、大学生と高校生にアンケートを実施した。

その結果、青森県南部地域にも、他地域とは異なる特徴的な方言の使用が認められることが明らかになった。一方で、若者の方言に対する意識としては、「特に意識して使っていない」や「好きとも嫌いともいえない」といった消極的な回答が 30～40%となり、方言に対するこだわりや思いが薄いという推測も得られた。

キーワード : 方言アンケート，青森県南部地域，気づかない方言，伝統的方言，若者のことば